

18歳未満閲覧禁止。震より上のお姉ちゃん向け。 **R-18**

*An unofficial derivative work of SisterPrincess and BabyPrincess.*

# 家政婦を見た!

*mnfikmyhk::Fukapon*



「海神みかみい、おーい、海神みかみ亞里亞ありああ、聞いてるかあ？」  
改めて教壇から響いた声に、教室の静寂が崩れた。

「亞里亞ちゃん、ねえ、亞里亞ちゃん」

「……………」

名を呼ばれた少女の隣も色めくが、肝心の本人は無反応を保っている。

「ねえ、亞里亞ちゃんつてば」

「ふえ？」

肩を揺さぶられてはさすがに気付いたらしく、亞里亞は淡い色の髪を揺らした。

「指されてるよ。ここ、ここ読めば大丈夫だから」

「あ、うん」

彼女は隣から渡された教科書を持って立ち、明瞭な声で。

「済みません。ぼーっとしていました」

「……そう素直に言われると、俺もどう言っているのかわからんなあ。まあ何だ、次から気を付けろよ」

「はい」

日頃の行いが察せられる穏やかな返事をして、彼女は再び着席した。

お咎めなしで済んだことに胸を撫で下ろした様子もなく、もちろん反省した風でもなく。再び、上の空。

「眠い……」

彼女が小さくつぶやいた頃、教室はいつもの流れを取り戻していた。

「亞里亞ちゃん、今日、どうしたの？ 体調が悪い……わけではなさそうだけど」

「えっ？ 今日とはAランチときつねうどん大盛りだよ？ 体調は、んーと、ちょっと寝不足だけどういつも通りかな」

「あの、そうじゃなくて……」

「ん？ なあに？ 早く食べようよ。冷めちゃったらおいしくないよ？ 亞里亞は食べちゃうよ？」

そう言って箸を取った途端に、目の前の食事とは不釣り合いの華奢な身体が躍り出し、お約束のかけ声を放った。

「いただきます」

彼女は海神亞里亞。高校二年生。

「え、ええ、そうね。じゃあ、いただきます」

状況に抗えず、仕方なく自らの問いを一時差し押さえ、手を合わせ目を閉じる彼女は、河辺春風かわべはるか。先ほどから亞里亞に世話を焼いている同級生だ。

今日も今日とて、亞里亞はもうお揚げに食らいついてるだろうと春風が目を開けると、今日二度目のおかしなことが起こっている。

彼女がまだ、何も食べていない。

「くすん、ヘアゴム、忘れた……。食べにくいよう……」

長く垂らしたサイドの髪を邪魔そうにいじる亞里亞は、ちらりと正面の春風を見る。

「春風あ、持つてない？」

「ごめん、持つてない。髪を押さえながら食べてみたら？」

こんな感じにと、春風は左サイドの髪を器用に押さえて、日替わりそばセットのメインディッシュ、山菜そばを口に運んだ。

「無理無理、亞里亞には無理い。んーと、早くしないとこのびちゃやうよう」

べたべたと体中を触り、制服の中に何かいいものが入っていないかと物色。そして、ついに何かを見つけたようだ。

「そうだ！ これ、ぴったり！」

——シユルツ

「ちよ、ちよと、亞里亞ちゃんつ。こんな人前でえつ」

春風がこんなときでも丁寧な箸を置き、慌てて手を伸ばしたものの間に合わなかった。

彼女の大声で周囲の注目が集まる中、亞里亞は、これを一気に引き抜いた。

「リボンで髪を縛っちゃえ。亞里亞つてば賢い子なの！」

学内で一、二を争う美少女が、自ら胸元の、深紅のリボンを解く。着衣に影響がないとは言え、注目の的。性春真つ盛りの視線に至っては独り占めである。

「うっわ、すげえな。ああやって海神のリボン解いてる奴、いるんだろうなあ」

「いや、どうだ？ あいつ確かに可愛いけど、性格とんでもないつて聞かせ」

幸か不幸か、独占した視線には微妙な意も含まれていたが。

人目を気にしているのは春風だけ。亞里亞はそもそも周りなど気にせず、器用に髪をまとめリボンを結んだ。

「ほら、見て春風、完璧。しかもヘアゴムより可愛いかも？ どう？」

「亞里亞ちゃん、『どう？』じゃなくて……」

すっかり呆れ顔の春風を尻目に、ひよひよいと首を左右に振ってお披露目することで性能試験を完了、亞里亞は再び箸を持った。

利那、お揚げは消えた。

「それで、何のお話？」

その後十分とかわからず昼食を平らげた亞里亞は、マイペースに話

を再開した。春風の話聞いていないようで聞いていて、しかもちゃんと覚えているのは、才女とも鳴らず彼女らしい。

普通なら相手の方が「何？」と聞き返してしまいそうなシーンでもあるが、そこは一年生のときから付き合っている春風。ちゃんとわかっている。

「今朝から亞里亞ちゃんがぼーつとした感じだけど、どうかしたの？ って話」

「あれ？ そんなお話だった？ あのね、んー、春風にはちよつと、刺激が強いお話なの」

胸元にあるはずのリボンを後頭部で揺らす姿には似つかわしくもないが、彼女はお姉さん風を吹かせているらしい。意味深なことを言いながらにやつく亞里亞に、春風はわざとらしく頬を膨らませて言い返す。

「ぶんぶん、亞里亞ちゃんに子ども扱いされたくありませんっ」

「くすん、子ども扱いしたわけじゃないのに」

「泣き真似したつて無駄ですつ。話してくれるまでは許しませんからね」

春風の方がよほどお姉さん風を吹かせたようになってしまっているが、彼女自身は気付いていない。家族での役回りが、板に付いてしまっているのだろう。

そんな春風を攻めあぐねることもなく、亞里亞はあつさりと続ける。亞里亞はずつと妹として育ってきたが、もう、泣くことも、誰かに怯えることもなくなった。

「あのね、春風つて、弟さんのこと好きだよね？」

勇猛果敢ではあるものの、攻め方がうまいかは別問題のようだ。

目の前の春風はもはや、目の前の亞里亞を見ていない。

「……きゅん♡」

「……きゅんきゅん♡」

「春風あー、帰ってきてー」

「……きゅんきゅん♡きゅん♡」

(……………春風、またどっか行っちゃったの……)

亞里亞は自分の発言が不用意だったことに気付きながら、毎度おなじみ奥の手を使う。

「あつ、春風の弟さんだよ!」

わざとらしい指差し。

「えっ、ど、どこ? 王子様どこですか?」

春風の視線一八〇度回転。

そして彼女の後頭部では、やれやれといった顔。この手口が幾度重ねられたかは、亞里亞すら呆れるほど、言うまでもない。

「お帰りなさい、春風」

「……あーっ、また騙したのねっ!」

「だって、こうしないと春風が正気に戻らないの」

「し、仕方ないでしょ! 王子様のことを考えるときゅん♡っちゃうんだから」

毎度同じ本気の反応、毎度毎度同じ言い訳を聞かされている亞里亞だが、どうしても無下にはできない。

「うん、だから、話したくなかったのだけど……」

だからこそ、彼女は春風に話すことをためらっていた。

そんな彼女に、春風は当然。

「そんなことを言われたら余計気になる」

誰だって、ああもためらわれては聞きたくない。

それがわからない亞里亞でもないが、素直な彼女はついためらっ

てしまい。そしてついには、話してしまう。

「わかった。じゃあ、落ち着いて聞いてね?」

「うん」

亞里亞の妙に慎重な態度に春風は身構えながらも、興味の方が強いようで、身を乗り出して頷く。その姿を見てまたためらいそうになったけれども、亞里亞はゆっくりと、話し出した。

「昨日の夜のことなんだけど……」

## S

真つ暗な寝室の中、亞里亞はふと目が覚めた。

「……んっ、今、何時?」

半分寝言といった風情でつぶやきながら、枕元に手を伸ばし、ごそこそ。

「んっと……ん……」

うまいこと探り当てた携帯をパカッと開くと、今は別れて暮らしている姉妹たちの写真とともに、現在時刻が表示された。

——00時12分

大抵の高校生にとってはさほど遅くもなく、起きている人も多い時間だろう。しかし亞里亞にとっては就寝時間の真つ直中、真夜中である。幼い頃から今に至るまで、一緒に過ごすことの多い姉、咲耶が「女の子は早寝して、お肌を綺麗に保たないとダメなのよ?」と言いつつ聞かせ続けた賜物である。

そんな亞里亞なので他に選択肢があるわけもなく、もう一度寝ようとしたが、どうにも寝付けない。

(……………トイレ、行こ……………)

仕方なくベッドを降りる。向かいの二段ベッドでは姉が二人、寝

ているようだ。

二人とも会社勤めの社会人、日付変更線を越えての帰日も少ない。しかし極力、この部屋の長姉による教えは守られている。

そんな同室の二人を起こさぬよう、亞里亞はゆつくりドアノブを捻り。

——カチャ

廊下に出てすぐの階段を下りる。真つ暗かと思っていた階段が、意外にも薄明るい。

亞里亞が階下へ下り立つたとき、原因がわかった。リビングから明かりが漏れている。

(まだ起きてるお姉ちゃんもいるんだ……)

彼女たち姉妹全員が早寝というわけではない。故に不思議でも何でもない状況だが、みな寝ていると思っていた亞里亞にとって、これは未知の領域。多少なりとも興味がそえられる。

(誰がいるのかな……?)

亞里亞は半開きになったドアに首を突っ込んで、リビングを見回す。

(あれ? 誰もいない……)

部屋の中に入ってもう一度確認するも、やはりそこには誰もいなかった。

(電気の消し忘れかな? ……キッチンも点いている)

部屋の奥、キッチンの方も明るい。キッチンは九〇度折れた間取りになっているため、亞里亞の位置から中は見えないが、リビングと同じく電気を消し忘れているようだ。

(じいやっては、いつも私に『部屋を出るときは電気を消しなさい』って言うくせに。自分は点けっぱなしなの、いけないの)

ここ、亞里亞たちの住む家で、台所に立つのは「じいや」とも呼

ばれる水原百合子、一人だけ。

かつては一緒に暮らしていた十三姉妹、プラス一人の兄だが、今や三つの住まいに分かれていた。生活にあわせて分かれた故、似たもの同士が集まってしまったのだろうか。亞里亞たちのところには料理上手どころか、家事をまともにもできる姉妹が一人もいない。

そんな中、生活を支えているのが百合子。だからもちろん亞里亞も彼女には感謝しているが、幼い頃からの癖で軽く憎まれ口も叩いてしまう。

(いけないじいやには、明日、こつてりお説教してあげるんだから) 明日、百合子と話すことがちょっと楽しみになりながら、キッチンの方へ向かう。

(あ、『火の元確認』もしないといけないの)

百合子に教え込まれた作法を実行しようと思いつきながらキッチンに入る。

はずだった。

「えっ——?」

つい小声を出してしまった口を両手で無理矢理塞ぎ、キッチンに出しかけた顔を引っ込めた。

(えっ、だって、その、そんな、見間違い、じゃないよね……?) 目の前の光景はあまりに驚きに満ちていて、全く信じられない。けれども自身の目で見たことだけに、疑いようもない。

亞里亞は改めて確認すべくそうつと、キッチンを覗き込むと。(……あら、あら、あららら。見間違いなんかじゃないの!) 瞳に映った状況がやはり事実であったことを確かめると、逸る気持ちを抑えて、抜き足差し足、けれども早足でリビングを後ずさつた。

(四葉お姉ちゃんの気持ち、何となくわかるかも)

今はまだ亞里亞だけの秘密であるその事態を大切に抱えながら、急いで階段を上った。

（お姉ちゃんにも教えてあげよっ！）

数分後。相部屋の咲耶、衛、亞里亞は例外なく含みのある笑みを携え、廊下からリビング内の様子を窺っている。

さながら現場突入前の作戦会議。三人は小声で、とつても重要な会話中。

「ねえ、亞里亞ちゃん、本当なの？」

「本当だよ？ 亞里亞も信じられなかったけど、ちゃんと確認したもの」

「いいから早く行こうよ、早くしないと終わっちゃうよお」

「……衛ちゃんってば、ホントいつまでもお子様なんだから」

「じゃあ、ボクは先に行くねっ」

「あつ、ちよつと待ちなさいよっ」

「亞里亞も行くうー」

言うまでもなく、単なる野次馬だ。

なし崩し的に開始された突入、先陣を切る衛が改めてリビング内を確認。

「（——うん、誰もいない。入るよ）」

「（OK、行くわよ、亞里亞ちゃん）」

「（うん、わかった）」

アイコンタクトでの会話を経て、リビングに入った。

先ほどと同様にならぬよう、対象は未だキッチンにいるようだ。

音を立てずに迅速に、三人はキッチンの入り口に辿り着く。そして気付かれぬよう、中を覗いた。

——！！

首を引つ込め、三人とも一呼吸分、無言で事態を味わう。

そして次の呼吸で、感慨深げに小声を交換しあった。

「これはいいもの見たわ。亞里亞ちゃん、お手柄よ」

「ねえ？ 本当だったでしょう？」

「ちよ、ちよ、ちよと、これ見ちゃつていいのかなあ？」

衛だけはためらっているように見せたが、そんなのは口だけ。結局みな興味津々に観察を再開する。

「あつ、ダメです……」

「ダメじゃありませんよね？ じいやさん」

「だ、だつてあつ——」

「んっ——」

（あーもうつ、お兄様つてばそこは名前を呼ぶところでしょう？

何が『じいやさん』よつ空気読みなさいよっ）

（は、はわ、はわー、ききききききすすすすすすあー）

（あーもうつ、じいやつたら換気扇も消し忘れてるの！ 明日は絶対お説教だからねっ）

生成の生地で作られた飾り気のないパジャマ。覆い被さるは白いワイシャツに黒のストラックス。

キッチンにいたのは、百合子と航だった。

何をしているのかは一目瞭然。いつもは透き通るように白い百合子の肌が、上気して色づいている。とろんとした瞳に、いつもの厳しきは影を潜めていた。

二人は赤い唇を通じて繋がりが、時折、口腔に深艶なる蠢きが見える。

ひとしきりの接合を解くと、お互いを繋ぎ止めんとした唾液が滴り落ち、百合子のパジャマをつーつと汚す。

閉じきらずにてらてらと光る彼女の唇は、不意に嬌声を奏でた。

「あふうつ、ダメ、ダメです航様つ。はあうつ、聞こえちゃいますからつあつ」

航の掌が控えめなふくらみを捉え、百合子が小さく弓なりに引き絞られる。

パジャマの胸先にあわせて、百合子の眉間にも皺が寄る。

怒ったときとも、困ったときとも違う、それは亞里亞も見たことのない蠱惑の表情。それに抗うことなど、誰にできよう。

「そんな顔されたら、僕、もうつ——」

航は力尽くで百合子の腰を引き寄せ、怒張した奔塊を布越しの唇淵にぶち当てた。

「ウツ——」

「んつ、ヒヤツうアツ——」

同時に嘔み殺した呻きが、漏れる。着衣の下で止めどなく吐き出される熱液が二人の身体を支配し、声すら途切れた。

寸刻を経て、射た後の弓の如く百合子の身体は弛み、射た後の射手の如く航の表情は崩れた。

そんな二人を眺めていた六つの瞳は、みな揃って釘付けである。動きを止め、互いを抱き支える二人を見て。

（お兄様ったら、自分勝手……）

どろどろに蕩けた視線を交わしあう二人を見て。

（え、あ、あのえと、ひよつとして、二人つて付き合ってるの？）  
吸い付くように絡み合う二人の腰部を見て。

（あれ？ 透けてるの、しましまパンツ？ じいや、あんなの持つてたかなあ？）

三人はゴクリと生唾を飲みながら、一瞬たりとも見逃せぬと情事に喰らい込んでいた。

二人は置かれた状況に気付くわけもなく、ただひたすら互いの感

覚に身体を委ね、立ち尽くしている。

しばらくの後、また航の掌が蠢動を始めた。なだらかなふくらみを降り、細いくびれを味わうよう、這い降りる。パジャマのウエストにかかると、親指だけがするりと中に入り込み、また、這い降りる。

「……これ以上は、本当に、いけません。航様、また今度、外で」  
なされるがまだだった百合子が、少しだけいつもの強さを取り戻し、航に訴える。

けれども航の手は、止められない。それどころか俄に猛りを増した。

「でも……、その、出ちゃいそう……つ、だから——」

彼の焦りが、彼女の肌を外気に曝していく。

パジャマと一緒に下げられた布は、主との秘密の繋がりを残している。パールブルーストライプの清楚さが、その染みの淫靡さを昂進させる。

自らの欲情がべったり吐き塗られた聖心は期せず冷やされ、彼女はどうか、理性たる「じいや」を取り戻す。そして、この場で取るべき最善策を考えることができた。

（亞里亞様にこんな姿を見られるのは絶対にいけない。今、航様を収めるには……）

「その、お口で……、して、差し上げます、から……」

けれども一方の航は、欲に冒されるまま抗うことなく、己に飲み込まれていた。

航に見えていたのは、己が欲する百合子だけ。繕われた百合子の願いなど届きようもない。

フアスナー周辺がどろどろのスラックスを帯びたまま、航は少し引いていた腰を一気に登り押す。

「ごめんなさいっ、もウツ——」



いつもとは違うざらついた布の感覚。ドプリとぬめり気を溢れさせると同時に、それは冷まされつつあった百合子を再び攫った。

「んっふっあうッ——」

あまりに強い、切羽詰まった感覚に、百合子の中のじいやの存在は風前の灯火。

それでもまだまだ意識を保っていた右腕を何とか動かし、薄い掌で、航の哮る獣器を包んだ。

今の彼を包むなど逆効果も甚だしいことを、経験の浅い彼女が知るよしもない。それでも強い想いは、届いたのか。あるいは射して動けぬだけか。動きを止めた航に、百合子は心から強く、言葉を刻む。

「お願いします。私も、我慢できそうにありません。だからこれ以上は……」

「なら、一緒に——」

精一杯の掌を破り獣口を解放せんとする航を、百合子はもう一度、抑える。

「ダメですっ！ 私の、私の声……、亞里亞様に、聞こえてしまいます……」

彼女もとうに流されそうだった。けれども、彼との出会いのきっかけでもある、じいやとしての矜持が、最後の堤防を築く。

それは兄やにとて、あつさりと壊せるものではないだろう。……そう、彼が、兄やであれば。

もはや己が根源は狂いきつて、吐き出し続ける妖液が「兄や」を飲み込んだ、今の彼。百合子を欲するだけの海神航は、欲情に身を奪われている。

「お願い、挿れたい——」

そしてついには彼の欲情が、華奢な、けれども少し荒れた百合子の掌を薙ぎ払った。間髪入れず、戦慄き震える右手が妖液の絡みつ

くフアスナーを下ろし、装弾済みの獣を、真つ新新的にあてがう。

「大丈夫、大丈夫だからッ——」

何度目かの射撃を制御できず、航は咆哮のような言葉とともに百合子を侵す。

間際。

「うん、大丈夫。もう聞こえているから」

「お兄様、最低っ」

「——っ！」

「ウ……ッ…………」

パンと華奢なだけの手を合わせる音とともに、ふんわりとナイトドレスを揺らす少女、亞里亞が現れた。

同時に咲耶はつかつかとキッチンに突入、呆けた航の頬をパシッツと派手にひっぱたいて、百合子から引き剥がした。照準を合わせる前に撃たれた彼の汚濁だけが、どろりと彼女の肌に残っている。

「大丈夫ですか、百合子さん」

「——っ、す、すみませんっ。本当に、申し訳ございませんっ」

咲耶が声をかけると同時に、百合子はその場で居直り、強い力を込め土下座。

「そんな、百合子さんは何も悪くありませんっ」

予想外の百合子の反応に驚きながらも、咲耶は彼女の肩を抱き、ゆっくりと引き上げようとした。しかし頑として動かない。

「でも、でもっ。申し訳ございません、申し訳ございません亞里亞様っ」

微動だにせず床すれすれに額を固定した百合子に、謝られている亞里亞も困り顔。彼女には、今、百合子に謝られている理由がわからない。

「んー、じいやは何も悪くないよ？ ね？ 咲耶お姉ちゃん」

「ええ、百合子さんは何も悪くないわ。悪いのは、アレよ」

亞里亞の言葉に咲耶の表情は急冷、呆然と立つ航を一瞥し蔑む。

咲耶の優しき故に冷たい言葉を受けて、亞里亞はそばに屈み込み、百合子に声をかけた。

「ね、だからじいや、顔上げて」

けれども全く、状況は変わらない。

「いえ、私は亞里亞様のメイドとして——」

「じいやはもう、亞里亞のメイドじゃないよ？ みんなのお姉ちゃんだよ？」

「ですが、それでも——」

「んー。どうしたらじいやは、顔を上げてくれるの？ 鉛あげる？」

百合子に怒られ謝ることは多々経験してきた亞里亞だが、逆のパターンはこれが初めて。それほどまでに完璧な百合子にどう言った方がいいのか、全くわからない。だからせめて、自分の経験から考えようとしたけれども。

(亞里亞だったら、鉛で顔上げちゃうのに)

自分とは違いすぎる百合子に、亞里亞はすっかり困り果てている。

引つ張り上げてでも全く動かず、亞里亞の呼びかけにも応えない。

咲耶はどうしたらいいのか改めて悩むと、獣欲で汚された下半身が頭をよぎり、話はあとだと思ひ直す。

「百合子さん、今とはとにかく、着替えましょう？ そうだ、衛ちゃん、お風呂場に連れて行ってあげて」

咲耶の急な呼びかけに、すっかり出てくるタイミングを失っていた衛が、キッチンに顔を出した。

「あ、うん、ごめん、ボク、その、何もできなくて……」

「いいのよ、頭に血が上らないのは偉いわ」

目の前の事態についてはもちろん、ついカッとなつてしまったこ

ともあわせて、咲耶は二重で頭が痛い。そんな心中を気取られぬよう、極めて平静な表情のまま、百合子を衛に引き渡す。

続けて、彼女は落ち着きを払い、大切な仕事をこなした。

「お兄様、今日はもう、このうちに入つてこないでください」

まさに真夜中、丑三つ時。亞里亞たちの部屋には三人の他、シャワーを浴び着替えた百合子、遅ればせながら事態に気付いた四葉に花穂と、同じ屋根の下に住む女性陣が勢揃い。

「えーつと、まず、その、そう。百合子さんは何も悪くないし、謝らないでいいんですからね？」

妙な緊張感が包む中、咲耶は切り出した。が。

……………

包む空気は硬いまま。

さてどうしたものかと咲耶ですらお手上げの情勢であつたが、この家には若千約二名、空気を読めないものがある。

「ねえ、じいやは兄やと付き合ってるの？」

「それとも、まさか……無理矢理っ？」

亞里亞と花穂だ。

亞里亞の問いはまだしも、花穂のはさすがにいただけでない。これ以上は言わせぬと、衛が花穂の口を塞いだ。

おかげでまたしばらく、部屋は静寂を保っていたが、俯いたまま、百合子は打ち明けた。

「私は、兄や様、その、航様と、……お付き合ひさせていただいております」

「よかつたあ、無理矢理じゃ——」

「花穂ちゃんは黙って！」

余計な突っ込みが入りそうになつたところを衛が止めると、そん

な状況にも構わず亞里亞が再び口を開いた。

「おめでとう。じいやは今、幸せ？」

百合子は言いにくそうだったが、十分な間を置いて、答えた。

「……………はい」

「よかった。亞里亞、ずっと心配してた。亞里亞のせいで、じいやが……行かず後家？になつちゃうんじゃないかって」

「こ、こら、亞里亞ちゃん。なんてことを——」

今度は咲耶が亞里亞の口を塞ごうとするも、百合子の左手が、小さく制止した。

「い、いいんです、咲耶様。いいんです……」

「うん、いいの。だからね、じいや、笑って？」

「……はい。ありがとうございます」

亞里亞ちゃんの笑顔に、百合子も多少不自然だったが、笑顔を作る。

この機を境に部屋の空気は和らぎ、を超えて、華やいだ。

「しかし問題は、可憐と鞠絵ちゃんにどう説明するかよ」

ひとしきり盛り上がった後、咲耶はふと言った。

「あー、確かに。あの二人は今でも本気で、あにいに恋してるからなあ」

衛の発言にみなは同意を示し、少々険しい顔に変わる。

「では、隠し通すデスカ？」

今や本当に秘密が得意になった四葉が、いわゆる大人の提案をするも、残念ながらこの家には若干約二名のお子様がいる。

「無理だよお、亞里亞ちゃんが黙ってられないもん」

自らを棚に上げて難色を示す花穂。それを全く気にせず亞里亞も一言。

「うん、亞里亞と花穂お姉ちゃんは無理」

「う……………」

これには花穂もまいったらしく、反論のしようがない。彼女は言葉を使い、目を泳がせている。どうやら亞里亞が一枚上手だったようだ。

他方、事態の中心にいる百合子は未だ申し訳なさそうにしていた。

「済みません、私のせいで……」

「百合子さんは悪くないわ。何にせよ、二人の失恋は避けられないのよ……」

そんな彼女を元気づける咲耶と、すでに名案の模索を放り投げた衛が、とりあえず助けを呼ぶことで決めた。

「千影姉さんに相談してみたら？ いつでもこつち来られるだろうし」

「そうね、私から明日、電話しておくわ」

姉妹全員が領いたことを確認して、未明から薄明に移り変わろうとしていた頃、その場を解散した。

## §

「うっあー、それって『家政婦を見た！』ってヤツ？」

「せ、先生つ、いつからいたんですか？」

「眞深お姉ちゃん、それ、助詞が違う」

寝不足の理由を話し終えた頃、気付くと亞里亞の隣にいたのは山<sup>やま</sup>神<sup>がみ</sup>眞<sup>ま</sup>深<sup>み</sup>美<sup>み</sup>、通称、眞深。

「いんやー、そりや大変ねえ。つか、あんちゃんはそのままどうなつたの？」

十年前、突如亞里亞たちの姉になった彼女、相変わらず表向きは

あつけらかんとして、生徒にも人気のある英語の先生になっていた。例えばこうやって、昼食中に突然生徒にちよっかい出すあたり、生徒たちみんなの姉みたいな存在だ。

「……朝まで、お外。忘れていたの」

そして淡々と答える亜里亞は、今も彼女にとつて、妹の一人なのだろう。

「えっ……」

「さすが亜里亞ちゃん、相変わらず手厳しい。咲耶はきつとわざとだなー」

悪びれない亜里亞に多少の驚きを隠せない春風に対し、眞深美はやはりねと彼女のマイペースぶりを、さらには海神家をよく理解していた。

「うん、咲耶お姉ちゃんは今日も入れたくないって言ってた」

亜里亞も眞深美の妹だけに、姉の鋭い読みは日常とばかりに受け答えている。尤も亜里亞の場合、誰であろうとあつさり受け入れてしまう感もあるが。

「やっぱりねー。だから彼氏できないんだよねー」

「そうなの？」

眞深美の何気ないコメントに、亜里亞が予想以上に食いついた。端から見ているとどうと言うこともない反応だが、あまり他を気にしない彼女が、深く聞こうとする姿勢を見せるときは相当に興味を持っている。

これは家に帰ってから本人に確認しかねないと、眞深美はその辺釘を打ちつつ、おもしろそうなことになっているので自分も巻き込まれようと思を決めた。

「そうだよ、ってあたしが言っただけで言わないでよ？ まあとにかく、その辺も含め何かとおもしろそうだから、今日、久々泊まりに

行っている？」

「んー、亜里亞はいいと思う。一応じいやに聞いてみるね」

「おう、よろしくー」

早速受話器を耳に当てている亜里亞から、問題なく許諾が返ってくるのを待ちながら、眞深美はふと、矛先を春風に向けた。

「そう言えば、春風ちゃんのこともたくさん姉妹に男の子一人よね？」

「はい。十九人姉妹で、私の一つ下、ヒカルと同級生の弟が一人です」

「そっかあ。ちょうど十年前の、私たちみたいなものね」

ポスッとコロツケをフォークで刺し、一口に押し込めながら、眞深美はついつい、にやりとしてしまった。

(いいもの見つけ)

視界の端に、実に興味深いものを捉えた。

彼女はにやけ顔を隠そうともせず。ポスッとプチトマトを刺し、放り込んで喉を潤すと、多少無理矢理でも気にせず問うた。

「てことはさ、実は弟くんにも彼女がいたりしてね。どうなの？ その辺」

「いません心配ありません。だって、私の王子様ですもの♡」

眞深美の表情などお構いもせずきゅんきゅん♡している春風に、眞深美もきゅんきゅん♡が止まらない。

(春風ちゃんは可憐似かあ。こりやおもしろいわ)

持ち前の悪戯心フルスロットルで、そろそろ声が届く範囲に入ってきたカモをロツクオン、よく通る声で撃ち落とす。

「あらー、春風ちゃんの弟くんじやない。彼女連れて学食とはやるわねえ」

春風にわかるよう、わざとらしい物言いだ。眞深美は教え子と呼んでいる。

「先生、そんなことを言われても私は騙されせんからね」

弟がいると言われれば易々と騙されてしまう春風も、さすがにわずか数分前にやられたばかりでは二の舞も踏まない。自身、それを主張する反応だったが、今回は稀にも本当のことだった。

「いや、ホント。ねえ、弟くん？」

「ええ、まあ、はい……」

「えっ？ まさか、っ——」

「あ、この方が登くんのお姉さん？」

「じいや？ あのね、今日……」

にやけ顔が鋭さを増す眞深美。

面倒な人に捕まったなと苦笑する登。

事態が理解できず硬直気味の春風。

無邪気に華やく美少女。

状況には関せず電話する亞里亞。

各人各様の様相を呈し、一気に緊張感高まる学食のこのテーブル付近で、まず仕掛けたのはやはり彼女だ。

「弟くんってばやるう。ほらほら、彼女でしょお？ 紹介しよう」

「えと、あ、その、空は……」

さすがは眞深美、手慣れたものである。彼女が嬉々として促すと、狼狽する登の腕を放し、彼女と目される美少女自身が自己紹介を始めた。

「青葉空です。登くんの恋人ですっ！ と言いたいんですけど、告白の返事がなかなかもらえずまだお友達なのです。くすん」

空の言葉は、眞深美の期待を裏切り、事実を伝えた。

予想よりも正統派美少女な反応に、眞深美は心中で舌打ちをしなから、それでも十分とはかりにわざとらしく会話を繋ぐ。

「あら、男の子がハッキリしないのはいけないわあ。ねえ？ 春風

ちゃん」

そして問いかけられた春風は、最悪の事態こそ避けられたはずだが、「告白」という単語に当てられてしまい、正常な思考能力を失っている。

「そ、そうですね……」

視線が定まらぬ春風を見ながら、眞深美はもう一押し。

「既成事実作っちゃえ。事後に泣き落として完璧ね。先生が保証しちゃう！」

「きやーっ。そうしちやおつかない。今夜でもいいんだよ？ 登くんっ」

「ま、待って、それ違うって。せ、先生、知って——」

「はいはい、不純異性交遊のご相談は先生のいないところですね。野暮な指導とかしたくないからね」

何か言いかける登を無視して、眞深美は二人をしつしつと掌振って追い出す。

「はい、失礼いたします」

空は再び登の左腕にぶら下がると、眞深美に元気に返事して、彼を引っぱり去っていった。

「春風姉さん、その、違うか——」

登は左腕の引力に抵抗しながら言葉が発しているが、もう、春風の耳には届いていない。

「眞深お姉ちゃん、大丈夫ですってじいやが言ってた」

「おっけー。ありが——」

相変わらずのマイペースさで割って入る亞里亞に返ってきた声は、眞深美のものだけではなかった。

「私も」

驚きはとうに過ぎ、もはや怒りに変わったのだろう。目の据わっ

た表情が、鈍い声を放った。

「亞里亞ちゃん、私も泊まらせて」

(こりやすつごく、おもしろくなりそうねえ)

春風の狭まった視界の外で、眞深美は一人にやつきが止まらない。

## §

「それでそれで、どっちから告白したのよう？」

海神家の食卓は、いつも以上に賑やかだった。

「……航様から、です」

「へえ、あんちゃんもやるるときややるねえ。昔は咲耶の扱いにすら困ってたってえのに」

この家に住む妹五人と百合子に加え、眞深美と春風、そして連絡を受け愛車を飛ばしてきた千影。総勢九人も女性が集まれば、姦しい程度では済まされない。

「今も私には困ってるんじゃないかしら。今日も追い出しちゃったしね」

十年間、絶えず食卓の真ん中にあつた姿が、ない。その原因はどいうやら咲耶らしい。

さすがに可哀相だという四葉と花穂に対し、衛はやむを得ないかという顔。問題の現場に居合わせたか否かで、だいぶ印象も違うのだろう。しかし今日の咲耶は、珍しく妹たちの意見も聞かず、自らの判断で押し切っていた。

「将来、百合子さんに追い出されるいい訓練になるわ」

「そ、そんな、私は追い出したりなんて……」

何を言われても俯き顔を真っ赤にして答える百合子に、周りはいちそうさまという笑顔で溢れていた。

「うん。じいやはそんなことしない。きつと延々お説教」

さすがは亞里亞、じいや歴が違う。よく知りすぎている。

淡々と放たれた重みのある言葉に、また食卓は大盛り上がり。

「お、言葉責めか？ SMか？ いんやーたまらんなあ」

「……蠟燭は専用品か和蠟燭にするデスよ？」

「きやーっ、花穂、よくわかんない」

温かすぎる冷やかに、顔から火を噴きそうな百合子。

この賑やかな中、みな、そろそろ気付いていた。今日のお客様が、逆に顔を青くしている事実。唯一未だに亞里亞だけが察していないのはさておき、眞深美は当然、連れてくる時点で気付いている。しかし、特に何も言わずに海神家一同に紹介していた。

(んー、彼女たちに混ぜたら元気になるかも？ ってのは甘かったかしらねえ)

小さな妹たちが泣いているとき、大抵は姉と一緒にしてあげれば泣き止んだ。眞深美の経験が、重たい事実を感付かせつつある。

(咲耶、お願い)

彼女は小さく、咲耶に目配せ。すると同じように経験を積んできた姉だけはあり、同じことを思っていたのだろう。やはり小さく頷き、口を開いた。

「そろそろ可憐にも発破をかけないとダメね。『告白なさい』って」

「あらあ、まだ秘めてたの？ 妹だからって遠慮することあないのにねえ」

「兄妹で恋人なんて例は、探せばいっぱいありそうデスよね」

「そうなの？」

——いけない、亞里亞ちゃんの発言は危険だ

妹一同そう思ったが、手を打つにはあまりに時間がなかった。言い淀むことは全くなく、みなが恐れた通りのことを亞里亞は言

つてしまった。

「それなら、春風もがんばらないとね」

——なんてことを……………

予想通りの痛烈な発言に、どうしたものかと恐る恐る、春風の顔を見た。

「そつか……」

——え？

みな視線の先には、眼光を取り戻し、強く言葉を紡ぎ出す少女。

「そうですよ」

——あれ？

少女は、一人頷き、箸を握ったままの掌で硬い拳を作る。

「決めました。私も、告白します。王子様はきつと、応えてくれますっ♡」

ついには一人立ち上がり、宣誓する春風。

——結果オーライ……？

食卓には安堵の光が差した。よくわからないが、素晴らしい結論に至ったのだろう。

「ああ、がんばれ。……私も未だ、可憐と鞠絵の考えは理解できないのだよ」

千影の言葉は、今の彼女たちの心境を端的に語っていた。

§

暖色の夕日が降り注ぐ、放課後の裏庭。

まさに打って付けの場所だろう。

「来たよ、弟さん」

「こおらっ、もつとこつそり見なさいっ」

物陰から見守る、と言うほどこそせせず、少し離れたところで現場を観察しているのは、亞里亞と眞深美。

結果として打開の一言となった亞里亞発言から一夜が明け、早くも事態はクライマックスである。

「春風、今日の放課後、告白するんだって」

半時前の亞里亞のメールには、さすがの眞深美も驚いた。しかし予想外だろうが何だろうが、見たいものは見たい。そこで多少の困難を薙ぎ払い、駆けつけた。

(つたくもう、職員会議すっぱかす言い訳もできなかったじゃない)

ひよつとしたら多大かも知れない代償を払った甲斐あって、最重要シーンにはキツチリ間に合ったようだ。

現れた登に、春風は鯉口を切る。

「あのね、今日はどうしても、伝えたいことがあるの」

「う、うん。何？ 姉さん」

背水の陣である春風に気圧され、登は何もわからないが緊張しているようだ。

そしてこちらも、緊張感の限界。

(あーもうっ、春風ちゃん泣かせたらただじゃおかないわよ)

いつの間に、でも当然に春風の味方となっている眞深美が手に汗握り。

(あつ、あとでじいやに『お祝いのごちそう用意して』って言うておこなくちや)

ちよつとずれてはいたが、亞里亞も亞里亞なりに彼女のことを強く願っていた。

——キーンコーンカーンコーン……

(おいおい、こりゃB級西部劇の決闘シーンか?)

相変わらずの特異能力を發揮し駆けつけ、亞里亞たちのさらに背

後から見守る千影が溜息をついたとき。

チャイムが鳴り終わると同時に、緊張の糸は、切つて落とされた。

「私、王子様が好きなのっ！ 登ちゃんが私の王子様なのっ！」

（あちゃー、こりやセンスないな！）

（ん？ 王子様が好きで登ちゃんが王子様だから、んーと、春風は登ちゃんが好き？ うん、そう、登ちゃんは弟！）

（……可憐と鞠絵にはちゃんと教えてあげよう、告白の仕方。これは姉としての義務だ）

「え、でも、あの、それって……」

（うっあー、煮え切らない男って最低ねえ）

（弟くん、兄やみたいだー）

（フフ、どうも重なるな。百合子さんのためにも、兄くんには指導が必要そうだ）

「好きな。恋してるの。男の人として、好きな」

（もうっ、恥ずかしすぎっ。あの胸に当てた手とか、乙女、乙女すぎるっ。私には無理っ）

（じいやも、こんなこと言つたのかなあ？ あ、言つたのは兄やだつたっけ）

（これ、芝居じゃないんだよ……な？）

「あの、でも、い、嫌だとか、そういう意味じゃなくて、そのなんて言うか、でも春風姉さんとは——」

（煮え切らないにも程がある。殺す、確実に死なす）

（どうして？ 空と春風とみんなで仲良くすればいいのに）

（……彼の台詞を聞いてしまうと、これが現実だと思ひ知らされるよ）

「ううん。いいの。王子様がたとえ私以外のお姫様を見つけても、空ちゃんと結婚しても、登ちゃんは私の王子様だから。いいの

……」

「いや、だから、それは……」

「ごめんなさいっ。今日も私、帰れないからっ——」

ぶあつと突如吹いた横風に、彼女のプリーツスカートは大きく煽られる。

いつもの彼女ならば、誰よりも気を遣い、スカートを押さえただらう。

けれども春風は、中が見えることも全く気にせず、風に身を任せ走り去る。数秒とせず、登の視界から消えようとする。

そのとき。

「おーい、春風あー。こいつはあ、空は男だぞおー」

（——？）

直上の三階の教室から、よく知つた声が聞こえた。

（……ヒカル？）

春風が声の方に向き直ると、ヒカルは今一度、大きな声で言う。

「この前一緒にいたこいつ、空は男なんだよー。だから彼女なんかじゃないからなーっ」

「えっ？ 彼女が、男の子……？」

強い横風が、ぼかんと口を開けた春風から、大粒の涙を奪い去つていった。

## §

「あたしはこれでも先生だかんねー。受け持ちの学年のことは知つてるって」

「でしたら、どうして……」

「いやだって、おもしろそうだったから。おもしろかったし」



今日も海神家の夕食は、明るく賑やかだった。

「そんなことやってるから、彼氏の一人もできないんですよ」

昨日と変わったことと言えば、新しい顔が一つ増えて。

「いんやー、ホントその通りなんだよー」

「ヒカル、そんなにツンツンしてたら、あなたも彼氏できないわよ？」

暗い顔が一つ減った。

「べ、別につ、彼氏なんかいらさないから」

「本当にいいの？」

「……春風だっていないだろうが」

「私には王子様がいるもんっ♡」

「返事もらつてないだろ？」

「うんっ、王子様は私が好き♡ 言わなくてもわかるわ。さつきはちょっと、びっくりしちやっただけなんだもんっ」

春風は極めて上機嫌で、今日は自ら腕をふるった料理の数々をパクパクと勢よく食べている。

方やヒカルもいつも通りにしつかりたくさん食べながら、夢見がちな姉を更正させようと躍起になっていた。

そんな姿を見て、十年前に同じ道を走り抜けた彼女たちも、つい笑ってしまう。

「なんかおかしいけど、いいよね。好きな人がいるってさ」

憧れの百合子のようにデキる女になりたいと、大学にて勉強中の花穂。

「そうデスね。あー、四葉も恋したくなっちゃった」

夢を叶えて、仕事が恋人の四葉。

「そのときはボクが、必殺のメイクをしたげるからね」

縁遠いと思われた化粧品に携わる衛。

人は変わる。けれども、家族であることは、一生変わらない。

「咲耶お姉ちゃん、どこ行つたの？」

「フフ……秘密の拷問さ」

「あの、その……、航様は、ご無事なのでしょうか……？」  
彼女たちの十年後もきつと、それは真実。

## あとがき

二次創作って楽しいですねー。

ども、Futakaponです。ふと気付けば十年以上書いている私なのですが、いわゆる二次創作ってこれが初めてなんです。書き始めるまでは「感覚が掴めないかも」と心配もしていたのですが、オリジナルとそう変わりませんね。キャラ設定とかで悩む必要がない分、単純に楽しいって感じかな。二次創作人口が多いのも納得です。

今回はべびプリオンリーの「Iprincess」と、シスプリオンリーの「Sincerely Sisters」が同日ついで、新刊二本は無理とゆるー現実的なところも踏まえ、ニコイチにしてみました(間に合えばラストは二通りにしてるはずだけど無理かな、パジャマパーティーを省いて短くしているくらいだし)。シスプリの妹たちを十歳成長させると、亞里亞ちゃんと春風が同じ年あたりかなって思いついたのが事の発端です。

亞里亞ちゃんの兄やたる私としては、亞里亞ちゃんを出すのは必然でしたが……。言うまでもなく、彼女ってかなり特殊な子なんですよね。じいやをどうするかとか、十年後まともな人間になってるかとか(笑)、あれこれ考えて楽しませていただきました。亞里亞ちゃんは案外現実的な成長をしたかなと思うのですが、いかがでしょうか。全員とはいかずとも、半分以上の具合がわかるようにはできたのも満足です。

一方のべびプリ側は、春風。春風です。だって私は春風なんだから。と、わかる人にはわかる発言をしつつ。他の姉妹が出せなかつ

たのは残念。かろうじてヒカルは出てきましたけど、ホタとかホタとかユキとか……。正直、十九人って扱いきれないよなあと思いはがらも、次に機会があればがんばってみたいです。

あれから十年。周りに言わせると私は変わっていないらしいのですが、私が考えてもあまり変わってはいないのですが、悪化はしています。亞里亞ちゃんのお洋服は着られませんでした。春風のお洋服は作って着ちゃったり。さて次の十年では、何か変わるのでしょうか。願わくば、また悪化していて欲しい(笑)

では、この辺で。最後までお読みいただき、ありがとうございます。

次は数日後、コミティアでお会いしましょう。きっと新刊はできています。できているよね。できていてくれ。

二〇〇八年二月、兄やにも王子様にもなれない人でないものより疲れを込めて。

# 家政婦を見た!

Fukapon

2009年2月11日 初版発行

発行所 まにふいくみやほか  
印刷／製本 株式会社 帆風

Copyright © 2009 Fukapon <fukapon@projectkaigo.org>  
<http://www.projectkaigo.org/>

チューリップ組05  
まにふいくみやはか  
春風じゃないものだったアレ担当

19princess  
A4 人形町

都営浅草線で5駅9分

32姉妹の気持ち、受け取って

2月11日 思いつきで2店舗同時営業中

大門<sup>B2</sup>  
Sincerely  
Sisters

星04  
まにふいくみやはか  
兄チャマが遅刻せずに売り子中